

2017年度島根大学附属図書館企画展示「戦争と平和を 考える2017－記録された戦争体験－」実施報告

島根大学企画部図書情報課情報サービスグループ 小林 奈緒子

1. はじめに

島根大学附属図書館本館では、企画展「戦争と平和を考える2017－記録された戦争体験－」を開催した（期間：2017(平成29)年11月27日～12月22日）。当館では、戦争や平和に関する資料の展示等を通して理解を深め、自由な議論の場を提供することを目的として2014（平成26）年より毎年継続して開催しており¹⁾、今年度は「記録された戦争体験」をテーマとして実施した。今回は、地域の戦争体験をより深く知るために、近隣の公共図書館や公共施設から県内の戦争体験記をはじめ、当時の「のぼり」、軍人手帳、従軍日記などを借り受け、合計約90点の史資料のほか、それらを解説するパネルを作成し展示した。

また、教養科目「平和学」と連携し、担当教員からの推薦図書もあわせて展示した。そして関連イベントとして、2回にわたって開催したギャラリートークでは、本学名誉教授の吉野蕃人氏と常松正雄氏に、それぞれシベリア抑留体験と勤労働員の体験について話をいただいた。本稿では、これら一連の企画展および関連イベントについて報告する。

2. 企画展示について

2.1 企画展の概要

今回の企画展「戦争と平和を考える2017－記録された戦争体験－」は、2017（平成29）年11月27日から同年12月22日まで、当館1階展示室にて開催した。期間中、展示室は当館の開館時間にあわせ、平日朝8時30分の開館から21時30分の閉館まで、土日祝日は朝10時から17時30分まで開室した。開室期間は合計26日間で、入場者数は642人に上った²⁾。平日の平均は29.20人、

休日は9.67人、期間平均は24.69人であった。

2.2 開催の趣旨

本学の前身、旧制松江高等学校（以下、旧制松高）では、多くの在学生在、戦場に行き命を落としたり、あるいは広島・長崎で被爆死したりなどしている³⁾。また、日本の大学・研究機関は、先のアジア・太平洋戦争で戦争に協力する学問を生みだし、軍事研究に深くかかわり、多くの学生を戦場に送り出したという苦い経験をもつ。戦後、この戦争遂行に加担したあやまちを二度とくりかえさないため、大学や研究機関は平和目的の研究のみに従事し、軍事研究は行わないことを固く誓った⁴⁾。

そのような歴史を踏まえ、大学図書館として様々な資料提供の活動を通して利用者に情報を提供するという行為を考えた時、当館が所蔵する永井隆⁵⁾の寄贈図書や、先の戦争で中国にて捕虜となった後に帰国し、日中の友好のため尽力した山陰中国帰還者連絡会（以下、山陰中帰連）の資料⁶⁾などをはじめ、戦争や平和に関する資料の展示を通して理解を深め、自由な議論の場を提供することは大切な活動である。

また、本学では近年、教養科目として「平和学」が開講され、多くの学生が受講していることから、この授業と連携し、図書館が必要な資料や情報を提供する意義は大きい。本企画展は、2014（平成26）年より毎年継続して開催してきたところであるが、継続的な開催が重要との観点から、今年度は「記録された戦争体験」のテーマで開催した。

2.3 準備と構想

まず、企画展を計画するにあたって、大まかな計画を立て企画書を作成する段階で当館の有志スタッフでチームを作り、2回の打ち合わせを重ねながら準備を進めた。例年夏に開催していたが、他企画展とのスケジュール調整の結果、11月下旬～12月の開催が決まった。

これまでの企画展では、永井隆や山陰中帰連の資料を取り上げてきたが、今回は戦争体験を間接的に知る方法として身近な「本（＝戦争体験記）」を重点的に取り上げることにした。書かれた戦争体験記を「読んで学ぶ」事を勧め、戦争体験がその人の人生にとってどんなものであったのか思いを寄せ、

一人一人の人生をより多く知って考える機会としてほしいという企図があった。できるだけ地域の身近な戦争体験記を集めようと当館の蔵書を当たってみたが、思いの外戦争体験記は少なく思案していたところ、打ち合わせ時に他のスタッフから「近隣の公共図書館なら多くの戦争体験記を持っているので、展示用に貸出を依頼してみてもどうか」というアドバイスがあった。近隣の公共図書館から展示用に資料を借り受けた例がこれまでなく、色々と手探りで準備であったが、島根県立図書館、松江市立中央図書館へ相談したところ、快く応じていただいた。結果として、選書から貸出までお世話になり、合計21冊の貴重な地域の戦争体験記を借り受け展示することができた。また、企画展に並べたい図書については、当館の蔵書及び他館からの借受図書だけではなく、新たに資料を購入し、準備を進めた。

今回企画展を構想する中で、当館の地域資料室にある一冊の本に出会った。曾田幸広編『梅田房雄従軍日記 北支転戦記』である。地域の戦争体験記を拾っていく作業の中で見つけた資料で、この中で紹介されている日記には、梅田房雄氏に赤紙が来て応召され従軍し、やがて病になり帰国する間一日も休まず日々の出来事が記録されている。その後彼は戦病死するのだが、この日記は遺族が大切に保管しており、その後彼の弟である梅田敏男氏が文字を起こし、まとめられた。それがこの資料である。この本はやがて甥に当たる曾田幸広氏が第4版を編集し刊行されるが、この第4版の末尾に一つの新聞記事が紹介されていた。それは、松江市雑賀町から梅田房雄氏と同じ日に中国戦線へ出征した、山村栄吉氏についての紹介であった。彼も同様に手帳を記しており、中国北部にある現在の山西省太原市で戦死したが、その手帳は戦友が持ち帰り、遺族の手に渡って現在は同町の公民館に保管されている、という内容のものだった⁷⁾。曾田氏は、この日記の最後の記述が1937(昭和12)年11月8日で終わっていることについて触れ、梅田房雄氏の日記にも当時の状況が克明に伝わってくることを述べていた。そこで、松江市雑賀公民館へ問い合わせたところ、確かにその資料はあり、現在は同町の松江市先人記念館で保管しているという旨の回答を得た。幸い、同記念館の資料を管理している福岡修之前雑賀公民館長とは面識があり、話はすぐに進んだ。驚いたのは、この山村氏の手帳のみ借りるつもりであったのが、他に山村氏関係の資料が軍服から出征時に掲げられた「のぼり」まで、次から次に貴重な史料を

出されてきたことであった。さらには、当時を知る資料として、双六や雑誌、慰問袋、遺言書入れ、出征時に渡された寄せ書き日の丸など、多数紹介いただいた。しかし、今回は「本」の展示をメインにしたいという思いもあって、ごく一部の資料のみ借り受けることになった。詳しくは展示目録をご参照いただきたい（別表、p.62-64）。

『梅田房雄従軍日記 北支転戦記』から、このように別の資料をたぐり寄せることができたわけだが、他にもこの梅田房雄氏の出征前の日記・手紙が一括された『戦雲春愁記』があり、こちらは浜田市立中央図書館のご厚意で展示用に借り受けた。

他館から借り受けた資料については、利用者が誤って館外に持ち出さないよう工夫が必要であったため、有志スタッフと検討した。その結果、資料に透明のカバーを被せ、その中に「持ち出し禁止」の用紙を挟み込みこむことにした。

また、今回は来場者になるべく多くの本を手にとって読んでもらいたいと考え、展示ケースよりも長机を多く配置し、その上に展示用図書を多く並べた（図1）。また、展示用図書については、それぞれの特に読んでもらいたいページを書いた紙を挟み、視覚的効果を狙った（図2）。

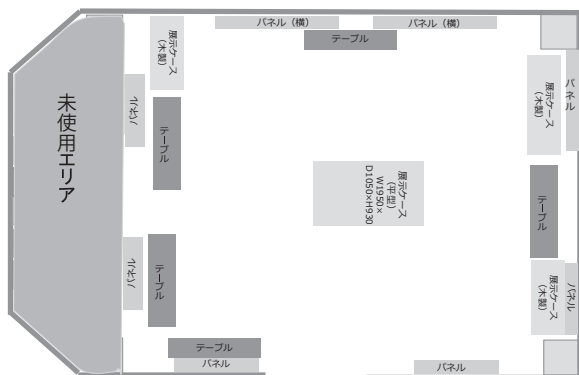


図1 展示室レイアウト

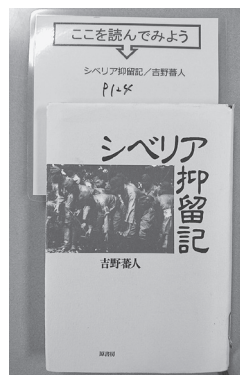


図2 展示の工夫

2.4 展示内容

展示は、作成した7枚の解説パネルと、これに対応する形で資料を紹介した。

一、「資料が語る戦争体験①従軍体験」では、先述した『梅田房雄従軍日記 北支転戦記』を紹介し、解説を行った。また、山村栄吉氏の手帳について触れ、パネル下の展示ケースで山村氏関係の史料の展示を行った。また、展示ケース横に長机を配置し、関連図書を展示した。

二、「資料が語る戦争体験②勤労働員」では、埼玉の女学校時に勤労働員を経験した初見千恵子氏の手記を取り上げ、解説を行った。初見千恵子氏の手記については、彼女の娘であり今回手記の文字起こしをした、本学生物資源科学部准教授の初見真知子氏から本学法文学部の関耕

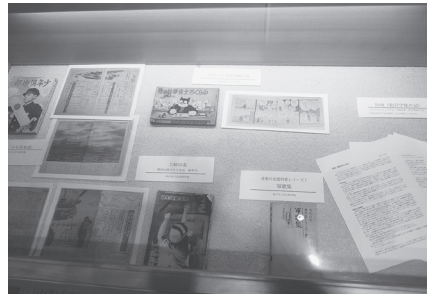


図3 展示ケース(右端が初見氏の手記)

平准教授へ2017年春資料提供があった際に、筆者へも提供いただいていた。今回の展示にあたって、初見准教授に手記の展示および印刷・配布について了解を得て、来場者に提供した。また、このパネルの下でも、展示ケースを配置し銃後の様子が分かる当時の雑誌などを展示した(図3)。

三、「資料が語る戦争体験③空襲・原爆・沖縄戦」では、銃後の戦争体験を凝縮させた内容となった。ここでは、展示ケースは配置せず、長机を配置し「銃後、空襲、原爆、沖縄戦の体験記」をキーワードに集めた図書の展示を行った。

四、「近隣の戦争被害」では、あまり空襲被害がなかったと言われていた鳥根・鳥取にも、戦争末期には多くの敵機が飛来し攻撃を受けていたことを解説した。また、その関連図書を近くに展示した。

五、「戦後を生きる」では、元兵士たちが戦後どのような思いを抱えて生きていったのか、それらが分かる資料として先述した山陰中帰連資料や永井隆寄贈図書を展示ケースにて展示し、パネルにて解説を行った。

六、「戦争体験を語り継ぐ～県内の戦争体験記～」では、公共図書館から借り受けた資料を中心に展示を行った。ここでは、県内の戦争体験記の特徴として、松江に歩兵第63連隊、浜田に歩兵第21連隊があったことなどからこれらの従軍体験記や関連資料が多かったこと、広島と地理的に近いことから広島原爆の体験記や看護体験記なども見られることなどを解説した。

七、最後に「なぜ戦争体験を語るのか」では、それぞれの体験記に記された本人・遺族の思いを取り上げた。また、関連する図書をここでも展示した。

また、室内の中央に展示ケースを配置し、松江市先人記念館から借り受けた資料を展示した。山村栄吉氏を出征時に送り出した際の「のぼり」も借り受けたが、大きすぎて全容の展示が不可能であったため、全体の写真を撮影し、これをキャプションとともに壁面にはり、壁面パネルに吊すような形で展示した（図4）。



図4 のぼりの展示

2.5 広報

広報活動としては、事前広報として企画書・ポスターが出来上がった段階でマスコミへの周知を行った。また、併せて学内のデジタルサイネージ（大学正門、メインストリート、大学生協など）での掲示も行った。

このほか、各社の新聞記者へ個別にメールで企画展の案内を出し、取材に応じた。

その他、チラシを作成し館内入り口での配布を行い、ポスターは図書館入口ほか館内数カ所に掲示を行った（図5）。

また、ホームページや図書館Twitterなどで周知を行い、来場を呼びかけるとともに、「平



図5 企画展のポスター

和学」の教員に学生への周知を依頼した。学内の教職員一斉メールでも企画展開催を周知し、このメールを見て実際に来場した教員も少なくなかった。

開催後は、企画展の様子をなるべく発信しようと、図書館ブログに「開催のお知らせ」、「企画展のこぼれ話①」、「企画展のこぼれ話②」、「ギャラリートーク開催」などを投稿し周知した(図6)⁸⁾。



図6 図書館ブログ

2.6 アンケート結果

来場者にアンケートをお願いした。方法としては、展示室入口近くにアンケート用紙と回収箱を設置し、記入してもらうものである。その結果、21名の回答があった。来場者数642名でみると、3%の回収率となるため、アンケートの方法についても改善が必要である(図7-8、p.65-66)。

はじめに、来場者の年齢が一番多い世代が50代で、50代~80代の人々が14人となり、アンケート回答者の6割を超えた。

次に、来場者の居住地であるが、ほとんどが松江市内だった。また、これらの人々は半数が学内の学生・教職員で、半数は一般市民であった。これらの人々の来場目的を見てみると、回答者の7割にあたる15名が展示会を目的として来場しており、図書館利用のついでに来場した人は6名(2割)だった。

また、この展示会を知ったきっかけについてであるが、回答者の4割にあたる9名が学内の掲示またはチラシを見て来場していた。その他、新聞・テレビで見て来場した人も数名いたが、それよりも知人などから展示会について聞いてやってきた、という人が多かった。このことは、口コミによる宣伝も有効であることが分かる。

また、展示内容については、大変良かった・良かったという回答を多く得た。ただ、もっと実物があればよかった、といった意見やゆっくり読めるチャンスが欲しい、という意見もあった。今回は「本」をメインとして展示したためであるが、今後の課題としたい。

次に、印象に残った展示としては、手記、手帳、寄せ書き日の丸の旗、郷土関連の図書などが挙げられていた。中には、「一番は壁に掛けられたパネルの文章です。図書館の意志、意欲を感じました」とコメントを寄せていただいた来場者もあった。

今後の展示内容については、「本は読むのに時間がかかるので、視覚的で分かりやすいものがあると良い」「もっと実物があれば」などの意見があった。また、「もう少し宣伝が行きわたるといいと思いました。他図書館から借りてこられるのも大変だったでしょう。また企画して下さい」といった意見もあり、広報の難しさをあらためて認識した。

今後希望する展示については、「展示している資料を借りられると良い」「続けてほしい」「一つ、一人について掘り下げた展示（要研究）」といった意見もあった。特に最後の意見は筆者も同意するところで、これまでの少しずつ様々な資料の展示、というスタイルとは別に、一つの資料について調査を行い展示する「深みのある」展示も必要であると、今回の企画の中で感じていたところであった。今後は自館の資料についてテーマを定めて、継続的に資料を調査していきたい。

3. 関連イベントについて

3.1 教養科目「平和学」との連携

今年度も教養科目「平和学」との連携が出来ないかと、担当の法文学部片岡佳美教授へ相談したところ、快諾を得て協力いただいた。この「平和学」は、例年後期に開催され、15コマを様々な分野の教員が担当し、自分の専門から見た「平和」について論じる授業である。この講義をする担当教員からそれぞれ「平和学」を受講する学生にお勧めの図書を1



図9 教養科目「平和学」推薦図書展示

～数冊程度推薦してもらい、コメントもそれぞれ付けてもらっている(図9)。

これまででは、この授業と「戦争と平和を考える」企画展とは異なる時期に開催していた⁹⁾のだが、今回は同時期に開催となったことから、展示室付近で推薦図書の展示もあわせて行った。これらの図書については、通常の開架図書とは異なり、1週間のみ貸出可とした。

3.2 ギャラリートーク

毎回企画展ではギャラリートークを開催し戦争体験を聞いてきたのだが、今回の展示では、展示する資料と関連して「従軍体験」「銃後の体験」を聞くことが出来ればと思い、有志スタッフで検討を進めた。そこで、本学名誉教授の吉野蕃人氏と常松正雄氏にお願いできないか打診することとなった。吉野氏は1925（大正14）年に松江市雑賀町に生まれ、その後旧制松江中学から鳥取高等農林学校へ進学し、1945（昭和20）年2月に応召され、満州へ渡った。8月にはソ連が満州へ侵攻し、交戦するがじきに終戦を迎え、その後シベリア・オブルチェに抑留され1948（昭和23）年5月まで過酷な重労働などを強いられた経験を持つ。

常松氏は附属図書館研究開発室の顧問も務めている。1930（昭和5）年島根県出雲市平田町に生まれ、尋常小学校4年生の時に真珠湾攻撃があり、太平洋戦争が勃発した。その頃から銃後の仕事としての勤労動員を経験し、終戦末期の1945（昭和20）年4月に旧制島根師範学校へ入学した。

ギャラリートークの依頼をするにあたり、まず折良く来館された常松氏に口頭で依頼したところ、快諾を得た。また、吉野氏については、吉野氏の著書の末尾に記された住所を頼りに依頼文を送付し、こちらも快諾を得ることが出来た。

日時はお二人のご都合と図書館のスケジュール、および学生の授業時間などを考慮して、第1回目は12月6日水曜日13:30~15:00で吉野氏にお願いし、第2回目は同月14日木曜日12:45~14:15で常松氏にお願いした。どちらも、1時間ほど当時の体験をお話いただき、残り30分



図10 ギャラリートークの様子

はフロアからの質疑応答の時間に充てることにした。参加者は合わせて30人半ば程度集まり、貴重な戦争体験に質疑応答も活発に行われた（図10）。

4. おわりに

最後に、今回の企画展で得られた成果と今後の課題について述べたい。先述した開催の趣旨のように、資料の展示を通して戦争や平和への理解を深めることは出来たように思う。また、今回企画展を開催するにあたって、チームを組んで準備を進めたことで、様々な作業をスムーズに行うことが出来た。また、その中で各所において助言や作業のサポートも多く得られた。これらは今後の他の企画展やイベントでもそのノウハウを活かすことが出来るだろう。

アンケートでもコメントが寄せられていたが、この一連の企画展を2014年から継続的に開催していることを初めて知った、という来場者も少なくなく、「戦争と平和」の切り口で毎年継続していくことの大切さをあらためて実感した。他にも、今回「平和学」との連携として推薦図書を企画展と同時期に展示したが、授業で教員から企画展の宣伝をしてもらい、学生に推薦図書を見てもらいつつ展示室へ足を運んでもらう、という流れを設定したことについても、肯定的な意見が寄せられた。ただ、実際に「平和学」の推薦図書の貸出回数が低いという現状を考えると、推薦図書の展示の方法、展示室までの導線についてはもう少し改善の余地があり、今後の課題としたい。

付記

企画展を開催するにあたり、当館の企画展有志スタッフおよび情報サービスグループのスタッフには様々な助力をいただいた。また、貴重な資料を快く提供いただいた、鳥根県立図書館、松江市立中央図書館、浜田市立中央図書館、松江市先人記念館の福岡修之氏および松江市雑賀公民館の方々には大変お世話になった。そしてギャラリートーク開催にあたっては、吉野蕃人民並びに常松正雄氏には貴重な戦争体験をお話いただいた。記して御礼申し上げます。

注

- 1) 過去の企画展については、拙稿「大学図書館がつなぐ「地域」と「戦争・平和」：企画展「戦争と平和を考える2014」より」（*淞雲：島根大学附属図書館報*17, 32-49, 2015-03-27）をご覧ください。
- 2) 入場者数については、当館のスタッフの協力で入り口に赤外線カウンターを設置し、計測を行った。
- 3) 朝日新聞社松江支局編『旧制松江高物語』（今井書店、1968年）などに詳しい。
- 4) 日本学術会議の過去の声明を参照。日本学術会議，“提言・報告等【声明】”，<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/division-2.html>，（参照2018-01-25）。
- 5) 永井隆は、島根県松江市にて生まれ、少年時代を現在の同県雲南市三刀屋町で過ごした。その後旧制松江高等学校ののち長崎医科大学へ進学・卒業し同大学へ就職するが、助教だった1945（昭和20）年8月9日に原子爆弾の被害にあうが、自身も重傷のなか救護活動を続けた。その後白血病が進み、寝たきりの生活となる中、『いと子よ』『この子を残して』他著作活動を続けた。
- 6) 第二次世界大戦の終結を大陸でむかえ、ソビエト連邦に抑留されていた日本軍捕虜のうち、1950年7月に約1000名が中華人民共和国へ引き渡され、969名が撫順の戦犯管理所へ、うち130名が太原戦犯管理所へ収容された。戦犯として拘禁されていた者たちは、1956年6月より最高人民法院の法廷において行われた日本人戦犯に対する裁判で、一部を除いたそのほとんどの、1017名が起訴免除・即日釈放となった。これらの人々が、日本に帰還後結成した組織が中国帰還者連絡会（略称：中帰連）である。中帰連の全国本部は1957年に設立されたが、島根支部は1956年9月17日に結成されており、1958年1月には鳥取支部と合併して山陰支部となった。山陰中国帰還者連絡会および同資料については、拙稿「戦争体験といかに向き合うか：山陰中国帰還者連絡会の活動を事例として」（*島根大学法文学部山陰研究センター『山陰研究』* 4, 37-56, 2011-12-31）を参照。
- 7) 「戦死までの100日間つづる」『*山陰中央新報*』2011（平成23）年8月14日付。
- 8) 次のブログ記事などを参照。島根大学附属図書館のブログ，“企画展「戦争と平和を考える2017」および「平和学推薦図書」展示を開催中です！”，<http://shimadai-lib.hatenablog.jp/entry/2017/11/28/161706>，（参照2018-01-25）。
- 9) 過去の「平和学」との連携については前掲注1）3.2を参照。

別表 企画展「戦争と平和を考える2017～記録された戦争体験～」目録

所蔵機関

1) 資料が語る戦争体験①従軍体験（ケース展示）

1	『梅田房雄従軍日記 北支転戦記』 キャプション	
2	『戦雲春愁記』 キャプション	
3	戦時日記（山村栄吉氏）	先人記念館＝旧雑賀教育資料館
4	写真（山村栄吉氏）	〃
5	「支那事変の想出 元松江歩兵第六十三連隊 第十中隊戦友会」	〃
6	軍人手帳（山村栄吉氏）	〃

○テーブル展示

1	梅田房雄従軍日記 北支転戦記	本館
2	戦雲春愁記	浜田市立図書館
3	比島バレテの思い出	松江市立中央図書館
4	悲境の大地	〃
5	凍った大地に	〃
6	戦下の青春	〃
7	シベリヤの記録	〃
8	先の大戦の回想	〃
9	学徒出陣	島根県立図書館
10	シベリア抑留記／吉野蕃人	本館
11	戦場の諸相	〃
12	「北支」占領：その実相の断片：日中戦争従軍将兵の遺品と人生から	〃
13	南京引き裂かれた記憶：元兵士と被害者の証言	〃
14	兵士たちの戦後史	〃
15	戦場体験キャラバン：元兵士2500人の証言から	〃

2) 資料が語る戦争体験②～勤労動員にあけくれた学生～（ケース展示）

1	生物資源・初見先生母からの聞き取り史料（キャプション）	
2	「音楽の友 愛唱歌シリーズ7 軍歌集」	本館
3	「主婦の友 勝利の体当たり生活 新年号」	先人記念館＝旧雑賀教育資料館
4	「のらくろ士官学校の巻」(少年倶楽部新年号付録)	〃
5	雑誌「少年倶楽部」新年号	〃
6	生物資源・初見先生母からの聞き取り史料 キャプションあり	
7	旧制松高物語	本館
8	私と太平洋戦争	〃
9	戦争と民衆：太平洋戦争下の都市生活	〃
10	「銃後」の民衆経験：地域における翼賛運動	〃
11	プロパガンダ・ポスターにみる日本の戦争：135枚が映し出す真実	〃
12	戦争の傷あと	〃

3) 資料が語る戦争体験③～空襲・原爆体験～（テーブル展示）

1	平和を祈る	松江市立中央図書館
2	沖縄戦が問うもの	本館
3	原爆死の真実：きのご雲の下で起きていたこと	〃
4	ヒロシマの証言：平和を考える	〃

5	戦争を背負わされて：10代だった9人の証言	本館
6	ドキュメント東京大空襲：発掘された583枚の未公開写真を追う	〃
7	長崎の鐘；マニラの悲劇／永井隆〔著〕．長崎精機原子爆弾記／三菱重工長崎精機製作所〔編〕．雅子斃れず：長崎原子爆弾記／石田雅子〔著〕	〃
8	証言で学ぶ「沖縄問題」：観光しか知らない学生のために	〃
9	都民の空襲体験記録集	〃
10	証言は消えない広島の記事I；炎の日から20年広島の記事	〃
11	東京空襲下の生活日録：「銃後」が戦場化した10カ月	〃
12	銃後の動員	〃
13	本土に及ぶ戦禍	〃
14	帝国日本の崩壊	〃
15	東京空襲写真集：決定版：アメリカ軍の無差別爆撃による被害記録 = The collection of Tokyo air raids photographs／東京大空襲・戦災資料センター編	医学図書館

4) 近隣の戦争被害（テーブル展示）

1	鳥根県における空襲とその時代（新版）	本館
2	鳥根県玉湯町の水上市機基地について	松江市立中央図書館

5) 戦後を生きる（ケース展示）

1	永井隆「いとし子よ」	本館
2	長崎の鐘	〃
3	亡びぬものを	〃
4	この子を残して	〃
5	会報綴り・ファイル	〃
6	会報（創刊号）	〃
7	戦争体験を語り継ぐ集い・パンフレット	〃

○ テーブル展示

1	残してきた風景	本館
2	私の駆け足反省—藤原恒男回想録—	〃
3	自分史私と戦争と	〃
4	「戦争経験」の戦後史：語られた体験／証言／記憶／成田龍一著	〃
5	戦場体験者：沈黙の記録	〃
6	空襲に追われた被害者たちの戦後：東京と重慶消えない記憶	〃
7	シベリア抑留者たちの戦後：冷戦下の世論と運動1945-56年	〃

6) 戦争を語り継ぐ～県内の戦争体験記～（テーブル展示）

1	遥かなる大連	松江市立中央図書館
2	語り継ぐ為に	〃
3	いま甦る山陰海軍航空隊「大社基地」	〃
4	わがとこ聞きある記八雲町	〃
5	ふるさと忌部	〃
6	鹿島わがとこ聞きある記	〃
7	伝えておきたいぼくたちの少年時代	〃
8	戦争と平和を考える	〃

9	満蒙開拓青少年義勇軍の概況とその終焉	島根県立図書館
10	激動・昭和の足跡 第2集	〃
11	歩みの跡 遺族会創立三十周年記念文集	〃
12	満州に連れ出された女学生 島根県立大東高等女学校皇国農村学徒報国隊	〃
13	ビカー益田からヒロシマ・ナガサキー	松江市立中央図書館

7) なぜ戦争体験を語るのか (テーブル展示)

1	「戦後」はいかに語られるか／成田龍一著	本館
2	戦争記憶論：忘却、変容そして継承／関沢まゆみ編	〃
3	記憶と認識の中のアジア・太平洋戦争	〃
4	戦後史のなかの生活記録運動：東北農村の青年・女性たち	〃
5	戦後経験を生きる	〃
6	軍隊と地域社会を問う	〃

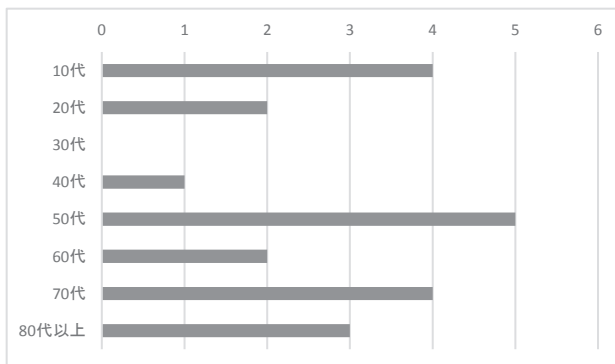
中央平型ケース

1	のぼり (「祝 入營 山村栄吉君」)	先人記念館 = 旧雑賀教育資料館
2	雑誌「日の丸」12月号	〃
3	遺品袋	〃
4	遺言書入れ	〃
5	お守り付き腹巻 (千人針)	〃
6	寄せ書き日の丸	〃
7	慰問袋 (紙製)	〃
8	慰問袋 (布製)	〃
9	雑誌付録「大東亜共栄圏地図」(「家の光」創刊十五周年記念付録)	〃
10	雑誌付録「へいたいさん双六」(「国民二年生」正月号付録)	〃

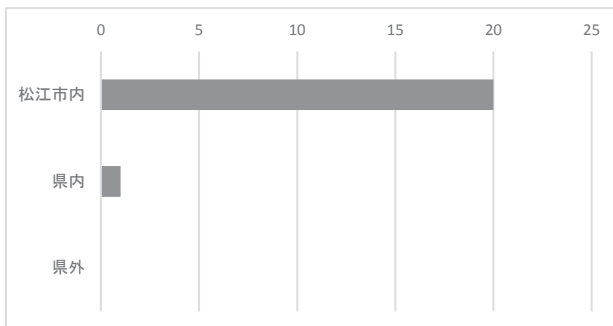
2017.11.27～12.22

1 参加者属性

(1)参加者年代



(2)参加者居住地



(3)参加者区分

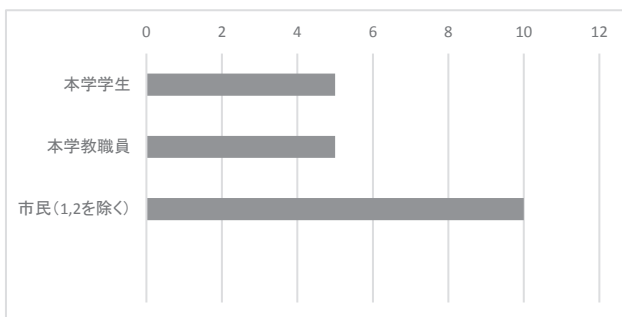
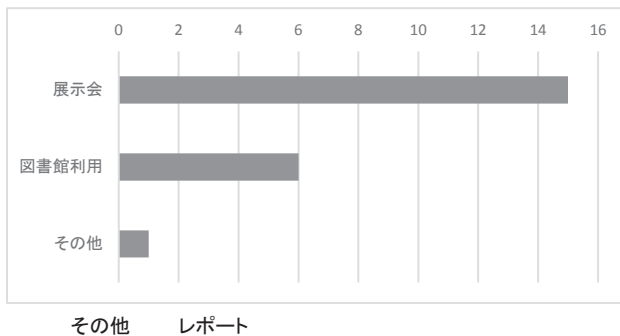
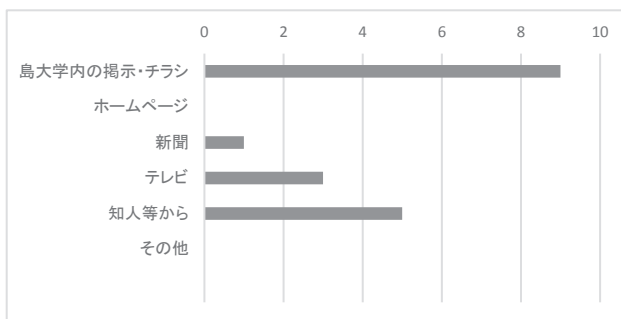


図7 企画展「戦争と平和を考える2017」アンケート集計結果

2 来場目的



3 この展示会を何で知りましたか



4 展示内容について

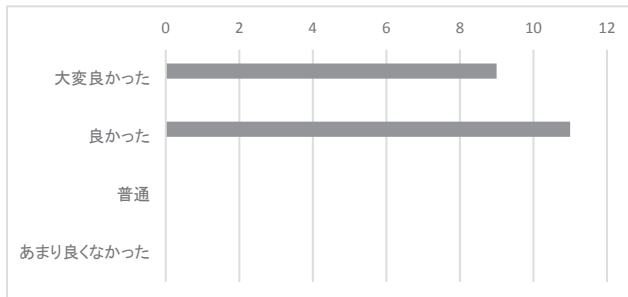


図 8